

「令和の日本型学校教育 千葉市型」の構築を目指して

—自立した学習者を育てるための6つのアプローチから—

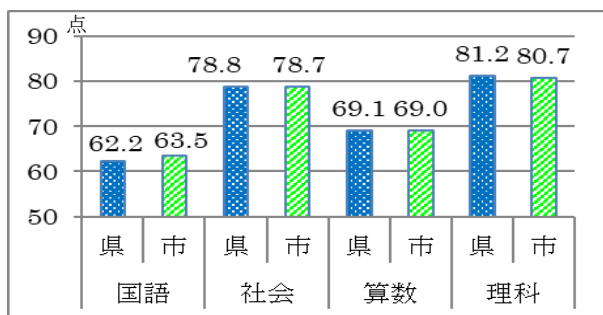
1 はじめに

令和3年1月の中教審答申(以下、答申)によると、我が国の「日本型学校教育」は子供たちの知・徳・体を一体で育み、広範囲にわたる全人的な教育という面などから大きな成果を挙げ、諸外国から高く評価されている。一方、「学力差の顕在化」「知識偏重の強い傾向」「いじめや不登校の増加」など多くの課題もあり、社会の急激な変化のもと、これまでの「日本型学校教育」の質的改善を図るため、答申では「令和の日本型教育」の必要性が示された。これは従来の「日本型学校教育」の成果や強みを維持しつつ、残された課題を解決するために必要な改善を進めることで、これまでの学校教育をブラッシュアップするという考えから生まれている(奈須、2022)。

本市においても同様の課題を抱えているが、特に答申でも述べられている「自立した学習者」の育成に焦点を当てることで教育の質を高め、特色ある「千葉市型」の学校教育を構築しようと考えた。

2 なぜ「自立した学習者」に着目したのか

一定の目標を全ての子供が達成するために、指導方法や教材を考え、工夫することは本市においてもよく行われてきた。しかし全国や千葉市学力状況調査の平均得点はここ数年変わらず、伸び悩んでいる([図1])。

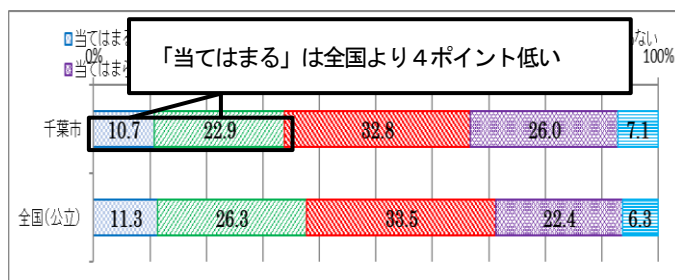


[図1] 令和3年度千葉市学力状況調査小学3年生の平均得点

令和4年度の全国学力・学習状況調査では、小学校、中学校共に全国平均得点(国語と算数・数学の合計平

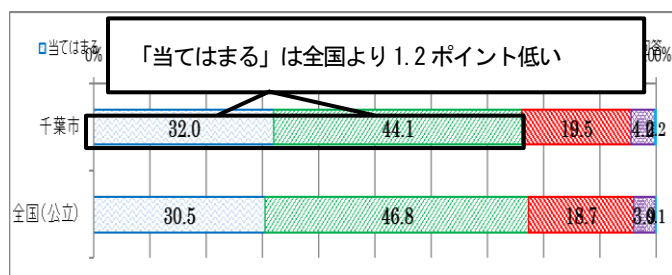
均得点)を下回った学校の方が多かった。

令和3年度の全国学力・学習状況調査の意識調査を見ると、休校中、計画的に学習を続けた本市の小・中学生の割合は全国平均より低かった([図2])。



[図2] 令和3年度全国学力・学習状況調査「休校期間中、計画的に学習を続けることができたか」の中学生の回答

また、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組む児童生徒の割合も全国平均より低い状況[図3]が数年続いており、主体的に学習することに課題がある。



[図3] 令和4年度全国学力・学習状況調査「課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいたか」の小学生の回答

これらの事実は、これまでの授業の考え方や方法を根本的に見直さなくてはならないことを示している。例えば、従来行われてきた「指導の個別化」は「自立した学習者」の育成に直接的にはつながっていなかったのではないかと。それは授業のデザインが主に教師の視点のみでなされていたためではないだろうか。そして子供の視点に立ち、子供たちがどのように授業を受け止め学んでいるか、という観点を見落としていたのではないだろうか。

今求められている「個別最適な学び」を実現していくためには、子供たちの視点に立ち、子供たち一人一

人の学習過程に着目し、自立的な学びができるように指導や支援をしていくことが必要である。つまり真の「自立した学習者」を育成していくことで「個別最適な学び」が実現し、教育の質的向上をもたらすと考えた。

3 「自立した学習者」の育成は学力向上につながる

「自立した学習者」とはどのような姿だろうか。本研究では以下のような姿であると捉えた（[資料1]）。

- ・自分が何がわかって何がわからないかがわかる
- ・わかるために自分で計画を立て、学びを進める
- ・粘り強く学習に取り組む（主体性をもち続ける）
- ・他の人と議論し、自分の意見と比較して、よさを取り入れることができる

[資料1] 「自立した学習者」の姿

これは「自ら学びに向かう姿勢」、すなわち学習評価の観点にも取り上げられている「主体的に学習に取り組む態度」の育成を図ることであると言える。そして、このことが学びの質が高まり、学力向上につながる近道となる。なぜか。

学習指導要領では、実際的な場面で活用できるような「生きて働く力」の育成が求められている。認知心理学的な見地から述べると、この能力は長期記憶に取り込まれている学習者固有の知識体系に基づき発揮される。つまり、授業で提供される情報が長期記憶に取り込まれなければ活用できる力にはなり得ない。

それでは、情報を長期記憶に取り込むために必要なものは何だろうか。それは「自分が求めている情報は何かということが明確であり（メタ認知）」「主体的にそれを求めようとしているか（主体的な学び）」ということである。この自ら学ぼうという意志がない、あるいは希薄な学びでは、与えられた情報が短期記憶に一時的に取り込まれたとしても時間の経過とともに破棄されてしまう。その結果として、活用できる力とはなり得ない。「自立した学習者」や「主体的に学習に取り組む態度」を育成することは「自分が求めている

情報」を意識的に探せる能力を身に付けさせることであり、必要な情報を長期記憶に効果的に取り込めるようにすることである。このことにより、問題解決に有効な活用できる力が培われていく。すなわち学びの質や学力向上につながることになるのである。

4 自立した学習者の育成をどう図るか

教育センターでは2つの側面から「自立した学習者」の育成を図ることとした。

1つ目は授業改善を中心とした、学習者に直接関わる面からのアプローチである。そのために、以下の3つの研究を行った。

①授業改善に関する研究

②ICT活用に関する研究

③デジタル・シティズンシップ教育に関する研究

2つ目は、授業を支える教職員や教育課程からのアプローチである。以下の3つの研究が「自立した学習者」の育成を支えるものと考えた。

④教育相談に関する研究

⑤教職員研修に関する研究

⑥教育課程に関する研究

各研究の位置付け、目指しているものは[図4]のとおりである。これらの6つの研究はどれも「自立した学習者」を育成するために必要不可欠であり、有機的に結び付いている。

5 研究の目的

「自立した学習者」としての子供を育てるため、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の実現を目指し、本市ではどのような教育を行っていけばよいのかを明らかにし、「令和の日本型学校教育 千葉市型」を構築する。

6 研究の方法

目指すべき子供の姿を具体的に描きながら6つの課題研究を進め、「自立した学習者」を育成していくためには何をどのようにしていけばよいかを探っていく。得られた結果を基に、本市教職員の行動指針を示すことで「千葉市型学校教育」の実現に迫る。

6つの研究の構造

「令和の日本型学校教育
千葉市型」

千葉市で目指す子供の姿
自立した学習者

自分が何がわかって
何がわからないかが
わかる

わかるために自分で
計画を立て、学びを
進める

他の人と議論し、自分の
意見と比較して、よさを
取り入れることができる

粘り強く学習
に取り組む

授業からのアプローチ

教師主導の一斉授業が多く
子供が自ら考え学ぶ力が
身に付いていない

1 授業改善に関する研究

「自立した学習者」を育成するための
授業の具体的な在り方

実現！子供目線の授業



大人が決めたルールを守らせて
いく一方的な指導では価値判断
の力を育成することが難しい

こういった使い方が「効果的」
なのかよくわからない

2 ICT活用に関する研究

自ら課題解決をする（＝「自立した学習者」）
ためのギガタブの効果的な活用

ギガタブ活用力UP！
効果的な活用



3 デジタル・シティズンシップ教育に関する研究

責任をもってデジタル技術を活用していく
（＝「自立した学習者」）子供たちの育成

デジタル社会参画！子供の
主体性を育む指導事例の開発

授業を支える教職員・教育課程 からのアプローチ

不登校でどこにもつながら
ない子供たちの増加

4 教育相談に関する研究

子供たちが自己理解できる（＝「自立した
学習者」）支援の具体策

教員や子供たちが一体となった
「支援の輪」の構築



「教職員に求められる力」を理解
して研修を受講する意識の低さ

5 教職員研修に関する研究

「自立した学習者」を育成するため
の教職員の資質能力の向上

教職員の学びのマネジメント力UP！



「自立した学習者」の育成の根幹をなす
カリキュラム・マネジメントに対する
教職員の意識の低さ

6 教育課程に関する研究（カリキュラム・マネジメント）

「自立した学習者」を効果的に育成するための、カリキュラム・マネジメントの推進

カリキュラム・マネジメント校内推進者の育成と支援



〔図4〕6つの研究の構造